



大阪支店時代(三井銀行社宅にて)の米山梅吉家族  
(前列左から)養母さく、三男桂三、養父藤三郎、次男駿二、夫人はる、次女澄子、(後列左から)長男東一郎、長女愛子、米山梅吉 (青山学院初等部提供)

米山梅吉は慶応四年(明治元年)二月四日の生まれである。大和国高取藩主植村家政の臣である父和田竹造と、伊豆三嶋大社の神職日比谷の娘である母うたの三男として生まれ、後に長男栄次郎、次男菊松がいる。

梅吉四歳の時に父竹造が四十三歳で逝去し、梅吉は母とともにやむなく三島に移り住んだ。そこから十五歳で上京するまで生活することになるが、七歳の時に、兄栄次郎が教師をしている映雪舎に入学した。そして神童と言われるくらい優秀で、十一歳の時に、旧今川時代から北條時代を経て四百年も続いた旧家で名主の米山家から養子縁組の話が持ち込まれた。その間東京での生活をしつつも二十歳で渡米する前に養子縁組をして米山藤三郎養嗣子として入籍し米山梅吉となった。

実母うたは、梅吉四十歳の明治四十一年八月大阪支店長の時に八十一歳で亡くなっている。米山梅吉はあまり自分の家族や生い立ちなどについて語ることがなかったといわれるが、うたが亡くなった折のことも記述に乏しく、どこに埋葬されているものかも現段階では不明である。同じように長兄、次兄についても記述があまり見当たらないが、次兄菊松が遺した『秋鶴詩鈔』の漢詩を手がかりに「米山先生と和田家の父母そして兄」という論考が、この館報に掲載されている。神崎正陳氏の平成二十四年春号館報掲載「米山先生と和田家の父母そして兄—和田竹造さんの墓参を契機として—」に続く第二弾である。想いをはせ米山家の人々について推論されている。

## 米山家の 記憶

この写真には実母は写らず、養父母と米山梅吉家族の写真である。明治三十三年、三十二歳で三井銀行大阪支店長代理で着任し、三十四歳で大津支店長として離任するまでの間に撮影された一枚である。

# 春季例祭 報告



講演:阿部 志郎氏



生子 哲男  
(第2620地区ガバナー)  
ご挨拶



講演会の様子



アトラクション:岸ミツアキ氏

米山梅吉記念館の春季例祭が平成29年4月22日(土曜日)に開催され、第2620地区生子哲男ガバナーをはじめ多くの皆様にご参加いただき、和やかなひと時を過ごしました。

神奈川県立保健福祉大学名誉学長の阿部志郎氏の講演『愛されて生き、生きて愛する』は、鷹揚なお話しぶりながら聞く者的心に深く重く届く内容で、豊かな余韻が残るお話しでした。

アトラクションは一転して岸ミツアキ氏のジャズピアノ演奏を楽しみました。素晴らしいテクニックと軽妙な話しぶりで、馴染みのある曲を何曲も演奏してくれて、手拍子をとりながらのミニコンサートになりました。

日時 平成29年4月22日(土) 14:00~  
場所 米山梅吉記念館  
講演 演題 「愛されて生き、生きて愛する」  
講師 阿部志郎氏  
神奈川県立保健福祉大学 名誉学長  
アトラクション  
ジャズピアノ演奏  
ジャズピアニスト 岸ミツアキ氏  
懇親会  
参加者 150人余

## 春季例祭 講 演

# 「愛されて生き、生きて愛する」

神奈川県立保健福祉大学名誉学長

講 師 阿部 志郎

子供たちにこういう話をしました。友達が遊びに来て二人で仲良く遊んでいると、三時になってお母さんがおやつの心配をしました。缶の底に一枚おせんべいがあった。友達と二人いるのにおせんべいは一枚しかない。「困ったね、君たちどうする」「簡単だよ。このおせんべいを割って二人で分ければいい。半分こすればいいんだね。大きい方を友達にあげなさい。友達は喜ぶよ。友達が喜んでくれたら君たちも嬉しいだろう。半分こしようね。」

インドの民話です。馬が二頭いる。一頭は母親、もう一頭は子供。どうやって母子を区別するか。ある賢人が言いました。「二頭の前に餌をおきなさい。先に食べるのが子供、母親は決して先に食べない。」乙武洋匡君という青年がいます。生まれた時に両手両足がなかった。母親がそれを見て卒倒するといけないとしばらく赤ちゃんに会わせなかった。しかし、赤ちゃんの顔を初めて覗きこんだ母親が「まあかわいらしい」喜びの声をあげました。これが母親です。授乳、この言葉が栄養士・看護士・保育士という専門職の語源で、こういう専門職は母親の子供に対する慈愛をモデルにしています。その母の愛を受けて愛されて、私達は愛する人になります。そして再び年を取って愛されるのであります。愛されて愛して愛される、これが私たちの人生と言っていいのかもしれません。

紹介を頂きましたが、私の先祖は静岡丸子で、そこで慶長年間に都落ちをして青森の津軽藩ができた時にそちらに移りました。安倍川の近くだったので阿部という姓を殿様から頂いたようです。青森に初めて私が墓参りをした時、住職が「あなたのお父さんはここには入れませんよ」といった言葉にショックを受けました。私の父は二男で家を出ている。墓とい

うのは本家の墓で、長男だけが代々入る。長男が死ぬと二男が継ぐ。長男が継げば、二男は家にいられない。

幕末に幕府が初めてアメリカに使節を送った。ポーハタン号に伴走したのが勝海舟が乗った咸臨丸で、ここに福沢諭吉が乗っていました。福沢はアメリカに行って、持ち帰ったのがただ一つ、ウェブスターの辞書でした。福沢らしいところでしょう。その福沢がアメリカに行ってアメリカを建国したワシントンの子孫がどうしているか、誰に聞いてもわからない。日本との違いを痛感したと書いています。私達は、墓は先祖累代の墓、仏壇には先祖の位牌を拝みます。親から子、子から孫という繋がりを大事にしてきました。ところがアメリカという社会は、家も基本は親と子ではなくて夫と妻です。夫と妻は元々他人で、結婚をして子供ができる血が繋がる。この他人の隣にいるのが隣人であり、夫と妻の延長線上にいるのが隣人です。隣という字、村ざかいという意味で、地理的概念、境界線です。縦と横という大きな違いがございます。

城が一つ象徴していると思います。青森弘前がちょうど今桜の季節です。あの桜はお城の中にあり、殿様が鑑賞し、庶民はお堀を隔てて遠くから眺めていました。城下町の道路は曲がりくねって、敵が迷うようにできている。殿様が近在の寺を連れてきて、寺町ができる。敵はお寺には踏み込むことはできない、すなわち城は殿様を守る為のものであった。

戦争のとき私たちが教えられたモットーは「一億玉碎国体護持」。アメリカと戦って一億人が死んでもいい、国体をまもる、天皇制でした。人間は人数でございました。殿様を最後に残せばいい、という構図を作っていました。ロンドンワインザー城、これは住

民を守るためにつくった城で、王様もそこに住んだという違いがあります。こうして隣人というものは、私達にとってはとても遠い存在で上から下への社会構造が貫かれておりました。

明治4年岩倉具視を団長として、二年間12カ国 の欧米を廻りました。その使節団が継承したのがビスマルク体制です。上から下への体制が組まれており、これをモデルにして国家主義体制をつくることになったわけです。

こういう社会の中で、米山梅吉は半分こする努力をしております。長泉小学校に図書館を寄附し、図書をそろえました。長男東一郎が亡くなりました、スポーツマンでした。そこで慶應にマラソン賞をつくりました。青山学院に柔剣道の道場をつくりました。三井報恩会を作りました。三井報恩会は支援財団として戦前戦後を通して最大の財団でございます。この報恩会で疲弊した農村復興をします。青森県の西平内村には今でも石碑が残っています。国民病の結核対策に取り組み、ハンセン病の援助もします。この根底に米山梅吉が書いた「新隠居論」があります。55歳で務めを辞めてあとは社会奉仕をしよう、という考え方です。55歳で三井の常務をやめて三井信託を設立し、最後に緑ヶ岡小学校と幼稚園を青山学院に寄附しました。話によると米山は教職員の給与を払うために書画骨董を処分し質屋に通った。すなわち米山は半分こではなくて全部を捧げ与えたということになります。まさにフロンティアの働きを、米山はしてきたわけです。

私は子供の頃、青山の小学校と幼稚園の中間に家があり、そこで米山夫妻の顔を時々見ておりました。米山梅吉と直接対面したことはない。でも姿はよく見ました。春子夫人は戦後二回会ったことがございます。私はその米山に憧れ実業家を目指しましたが、途中で挫折しました。今日、神山復生病院からシスターたちが来ておりますが、復生病院をたまたま訪ね、井深八重という看護婦に出会い、この看護婦さんについていこうと心に決めて、福祉の道に転換するということになったわけです。神山の復生病院とい

うのは明治22年にテストウッドと神父が始めました。何回か財政危機をむかえました。これを援助したのが目賀田種太郎逸子夫妻で、特に逸子夫人は大変熱心でした。

大正6年に目賀田種太郎を団長として財政経済使節団が政府からアメリカに派遣されます。これは天皇が裁可するという大変重要な使節団でございました。目賀田男爵ほか8名、皆肩書きをもった著名人です。そこにただ一人無冠の民間人がおりました。それが米山梅吉でした。米山はなぜ人々の中にいられたか、私は真相を存じません。逸子夫人は勝海舟の娘でございました。米山は勝海舟から直接指導をうけています。そういう関係があろうかと思ひますし、三井の巨頭団琢磨は明治4年の岩倉使節団に加わった人で、団の推薦があったともいわれております。目賀田にしろ團にしろ、米山梅吉の才能、交渉力、経済財政に関する知識、アメリカの文化を知り語学に堪能、そんな実力を認めたと考えられます。米山はアメリカで学んだいくつのことを行っておりました。ロータリークラブに初めて出席した、おそらく心に響くものがあったと思います。信託業務を知り、それを日本に持ち帰っている。フィランソロピーであります。

米山は本田庸一の同僚ハリスの斡旋によって、オハイオ州ウエスレアン大学に入学します。ウエスレアンというのは、ジョン・ウエスレーという人の系統につながった大学で、ウエスレーはメソジストというプロテスタンチズムの教派を作った人です。メソジストはアメリカで単一の最大の教派であり、800万くらい会員をもっています。ウエスレーは有名な言葉を残しました。「Gain all



ジョン・ウエスレー(1703-91)

you can Save all you can Give all you can」出来るだけ儲けて、出来るだけ貯えなさい、しかしどけるだけ与えなさい。できるだけ稼げといった宗教人はウエスレーくらいです。この思想が資本主義の思想を育てた、とマックスウェルが指摘をしています。

私が子供の時、クリスマスにアメリカからチョコレートが贈られてまいりました。食べたいけれど祖母が管理していてなかなか食べさせてくれない。妹と盗み食いをすると見つかって叱られました。その時のチョコレートがハーシーズのキスというチョコレートでした。子供のときから関心をもっていたので、留学をした時にペンシルベニアのハーシータウンに行きました。ハーシーという実業家がチョコレートで大儲けをして、ハーシータウン、図書館からホテル等全部自分で作りました。周りの丘の上にイングストリアルスクールという学校がございます。その学校に1200人の孤児が生活をし、500人の職員が働いております。購買部へ行くと、まるでデパート。ずらーっと服が並んでおり、子供が来るとサイズにあわせて着せる。運営費は、ハーシーが持ち株の半分を孤児院に寄附している。その配当で1700人の生活が成り立ち、子供達が工業高校へ行って力をつける、大学へ行きたければスクラーシップが用意されています。私はこの時から60数年、このチョコレートを欠かしたこと�이ありません。



ハーシータウンで学ぶ子どもたち(日本ハーシー社HPより)

日本で1万円以上機関に寄付行為をしますと、寄附控除を受ける。約10万人が控除をうけている。アメリカでは全世帯の7割が控除をうけている。その寄附額は日本人の35倍です。寄附をし与えるということ

に抵抗がない、与える文化がつくられている。

それに対してアジアはどうか。仏教国では僧侶が朝早く列をなして村や町に托鉢に出る。村人は僧侶が来るのを待ち受け、僧侶がくると食べ物を布施する。お金は決して扱いません。僧侶はそれを受けて寺に帰り、食事になります。同時に貧しい人に分かち与える。この時与える村人が僧侶にひざまずいて、受ける僧侶は立ったままでお礼もお絞りしません。ここにサービスという形が表れている。私達は受ける文化です。

戦後日本が貧窮になり、アメリカから救援物資がまいりました。これは政府ではなくアメリカの民間団体13団体が集めて日本に送り、日系人たちもこれを援助した。日系人は戦争中収容所に入れられ、家をとられ財産を失った。出てきても仕事がない。その人々が母国日本のために一生懸命援助を集めた。当時、400億円1500万の人々が、この恩恵にあづかりました。ララ物資の特徴の一つは、援助物資は食べたら終わり。でも日本はそれで終わりにしないで子供に与えた。ここから学校給食が始まったのです。このララ物資は、一切闇に流れませんでした。不幸なことに世界の援助物資の歴史には略奪暴動がございます。日本はかつて災害の援助で暴動をおこしたことはございません。これは輝かしい記録で、寄贈したアメリカが日本に感謝したのです。おそらく、儒教の影響があるかと思います。恕、という言葉、「己の欲せざるところこれをすることなかれ、人に迷惑をかけるな」そういう教えが私たちに浸透しているからだと思います。しかし残念ながら与える文化がない。貧しい。ではこれをこれからどうするか。大きな課題ではなかろうかと思います。

東日本大震災では中越地震で世話をになった新潟が、全市町村直ちに14000の避難をする人を受け入れると決議した。口蹄疫で援助を受けた宮崎県が24時間ぶとおして東北に物資を運びました。函館は228艘の漁船を岩手に寄贈した。これは昭和9年の函館の大火に支援を受けたお返しでした。熊本地震の時、台湾台南から市長さんが市民から集め

た2億円に自分の一ヶ月分の給料を足して熊本に届けてくれました。それは台南の地震に援助しているからということでした。お返しというのが私たちの一つの習わしです。葬儀に行くと香典返しが、結婚式に行くと帰りに持ちきれないほどのものを頂戴していく。与えると与えられる、これが互酬という習慣です。昭和39年にライシャワー駐日大使が暴漢に襲われました。日本政府は大慌てでございました。ライシャワーはただちに輸血を受けました。さすが外交官「これで私に日本人の血がかよいました」と言ってくれました。ところがB型肝炎になり、これがライシャワーの命とりになりました。この事件によって日本は売血から献血に切り替え、各地に血液センターをつくりました。献血手帳の裏表紙にこう書いてあります。「あなたとあなたのご家族が血液を必要とするときあなたが献血された同量を優先的に確保いたします」互酬性によって日本の献血が成り立っている。こういう歴史を私共は重ねているところであります。

戦後、日本は北欧にならって福祉国家建設を目指しました。その福祉国家を私共は誤解しました。福祉国家とは国が福祉に全責任を持つこと、その責任を行政が負う、と解釈したのです。家の前にゴミが落ちている。役場に電話して拾いに来いという、全国市町村にすぐやる課というのがつくれられ、役場は飛んできました。ドブがつまっている、役場がドブ撒らいをする。私共は権利を主張するだけです。これが福祉国家なのか。大違いです。福祉国家ができるにはそれなりの土壌がありました。

私の家内は、4年前に他界しましたが認知症でした。私は何処へでも連れてまいりました。アメリカに娘がおり、フロリダのディズニーランドに遊びに行きました。車いすを押して中に入ると、どのアトラクションも行列でした。近くへ行くと、係員が別の入り口からさっと車いすを通し私たち家族を入れてくれた。誰一人文句を言う人はいません。車いすでエレベーターの前を行きました。満員でした。もう一台待たなければならない、と思ったら、乗っている人々が降りて車いすを中に入れてくれました。私はかなわない、

と思いました。これが市民感覚。市民社会があつて初めて福祉国家が成り立つということを教えられたのです。こういう市民社会を私共はつくっていかなければならぬ。私はそれがロータリーの課題ではなかろうかと思います。

米山は緑ヶ岡小学校をつくり、生徒に4つのことを言っています。言葉・態度・服装・礼儀正しくありなさい、人に迷惑をかけてはいけない、嘘をついてはいけない、人から嬉しいと思うことをされたら人に嬉しいと思うことをしなさい、これが米山梅吉の教えでした。私の父は、東京銀座RCの会員でした。晩年にお世話になったのが服部礼二郎さんで、夫人が緑ヶ岡小学校の第一期生でした。「家内は米山校長の指導を守っているようですよ」とおっしゃった。米山は本多庸一の教えを守ってまいりました。運巧拙速、どんなに早くてもまずいことよりは遅くても上手のほうがいい、米山は自分の心に刻んできたのです。米山という人は全てを与えた、でも与えるということの難しさをよく知っていた。

人間は変わり社会も変わります。東日本大震災の時に、日本全国69の刑務所の受刑者たちが津波が押し寄せ家族を失い悲嘆にくれた人々の姿を見て、誰ともなしに金を集め、集められた義捐金が6000万円。自分のことしか考えない人達、愛されなかった人です。愛されないので愛することができませんでした。自分の利益をはかるために他人の利益を犯してきた人達です。その人達が苦しみ嘆き悲しんでいる人たちを見て、初めて人の幸せを願ったのです。私は刑務所に光が差した、否、刑務所から私共が光を照らされた、ここに新しい文化の可能性を感じました。

小沢理事長のいらっしゃる奨学会、莫大な数です。与えてください。与え受けるバランスのとれた新しい文化を、ロータリアンが実現してほしいと願っております。早く行きたければ一人でいきなさい。遠くへいきたければみんな一緒にいきなさい。仲間意識の強いロータリアンのみなさんがお互い肩をくんで、できるだけ遠くへ歩み続けていただきたいと思います。

# 米山先生と和田家の父母そして兄

神崎正陳  
(茅ヶ崎湘南RC)

前編(米山梅吉記念館館報平成24年春号に掲載)に、和田竹造さんの墓参を契機として、I墓参にいたる経緯、II墓参記、III和田家に関する資料、について記した。

この続編では、IV「秋邨詩鈔」において、米山先生の次兄菊松さんの著した「秋邨詩鈔」という漢詩集を中心に菊松さんの目を通して、和田家の人々そして米山先生との係わりについて可能な限り事実を探ってみた。V「高取藩と和田竹造さんの祖先をめぐって」において、前編と関心が重複する嫌いはあるが、高取藩と竹造さんとの接点を空想まで交えて模索してみた。そして、VI「米山先生の実父母に対する思い」において、米山先生が和田家および和田家の人々について、完璧にと言ってよいほどに口を緘した理由について、間接事実だけに基づいて推測を試みた。

の後どうしたろう? やはり東京にいて、会社に勤めながら、お母さんと一緒に暮らしていた。教員から中に転向したのだから、孝心の深い米山さんは黙って見てはいなかつたろう。

次兄の菊松氏は教導団を出たことは分かっている。陸軍に勤めたのだろうが、教導団は下士官の養成所だったから、進級に制限がある。精々大尉ぐらいのところで退職したのだろう。東京の郊外で養鶏をやっていたそうだ。菊松氏は米山さんに似て文藻があった。菊松氏は秋邨と号して、秋邨詩鈔の一冊を残している。冥福のために次の詩を引用する。

母に陪して先考の墓を展す  
寺門の松樹蒼煙を鎖す 萩里歌は残りて誰か又憐む。  
如今風樹の感に堪えず。墳壇泣いて對す夕陽の前。」(p.65-66.)



表紙

本扉

上のうたさんに関する記述は、あまりにも簡単すぎる。それと「病臥中であった」の次が「、」になっているのは「。」のミスプリントなのか、続く文章の脱落なのか、はつきりしない。栄次郎さん、菊松さんについての記述も、生活状況、家族構成、米山先生との交流等について、触れられていない。菊松さんの漢詩の読み下しを載せていることには、佐々木さんらしい人間味を感じるが、欲を言えばもっと関連のある詩を紹介してもらって良かったのではないかと愚痴を言いたくなる気持ちにもなる。

## IV 「秋邨詩鈔」について

1 佐々木さんが、米山先生の父母兄弟について語るところ少ないことは前編でも触れたが、長兄栄次郎さんと次兄菊松さんについて、「創意と奉仕」の「支店長時代」の章に、うたさんが亡くなったことに関連して、次のような簡単な記述がある。

「和田のお母さんは、米山さんが大阪の支店長の時、明治四十一年八月二十八日逝去された。折悪く米山さんはチフスで病臥中であった、三井銀行常務取締役として東京に落ち着いた頃、梅吉少年と米山家の縁を結んだ長兄の栄次郎氏はそ

秋邨詩鈔については、「追憶集一」の冒頭に、米山先生が中学生の時から生涯を通じての親友であった稻村真里氏の「米山君と余」と題する追憶文の中にも「米山君の仲兄和田菊松氏の秋邨詩鈔の中には「展墓」と「高取城」の詩がある。」という記述がある(「米山君と余」p.144.)。

私は「秋邨詩鈔」がどんな詩集なのか、前から読んでみたいとは思ってはいたが、これに触れた文献を読む機会にも恵まれないまま、手がかりが見つからなかった。今回ふと思いついて、米山梅吉記念館発行の「米山梅吉の跫音」を探してみた。「『秋邨詩鈔』(記念館所蔵)に高取城有感という詩がある。」という記載を見つけた(p.3.)。記念館に詩集の有無を確認したところ確かに存在し、記念館から借用することを得たので。以下に和田家に係わると思われる詩を紹介する。

2 A5版の変形とでもいうのだろうか、縦長の和綴じ50丁の詩集で、表紙に「秋邨詩鈔 全」と印刷された紙片が貼付してある。奥付には「大正九年十二月三日印刷 《非賣品》東京府豊多摩郡上戸塚九百五十八番地 著者和田松菊

東京市芝區愛宕下町二丁目二番地 印刷人  
荒井徳次郎 東京市芝區愛宕下町二丁目二番地 中外新論社」と記されている。

奥付を見て、大正時代の旧さを想った。菊松氏の住所の冒頭の東京府豊多摩郡という表記も現在の東京都にはない。現在の高田の馬場か西早稲田の辺りらしい。

次におやと思ったのが、「著者和田松菊」とあることだった。誤植かと思って本文を見ると著者ご本人が「松菊」と明記しているのである。それなら、佐々木さんの誤りかと調べてみると、巻末の年表(この年表は青山学院で作ったものらしい)には「菊松」となっている。上掲稻村氏も「仲兄和田菊松氏」とはつきり書いている。それでは雅号かと考えてみたが、詩鈔の表題に「秋邨」という立派な雅号が表記されている。雅号を幾つか称することは良くあることだが、著者名となると実名か通称を記すのが常識だろう。となると菊松氏が親のつけた

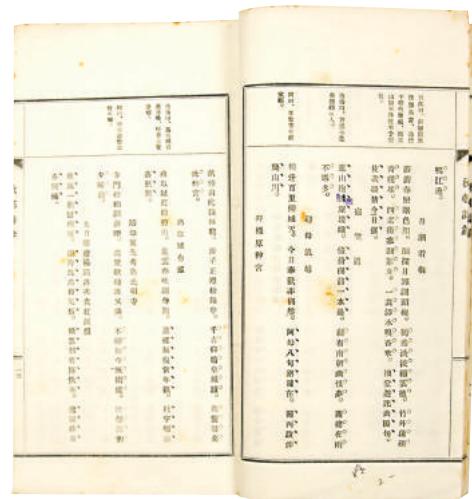
名前をひっくり返して通称とし、「松(しょう)菊(きく)」と名乗っていたとしか考えられない。

「菊松」という名は、父の竹造、弟の梅吉という名から考えて「キクマツ」と読むのが素直だろう。御一新だ、文明開化だ、と時代の変化は急激であつたにしても、士族の身として、菊松さんにもいろいろ思うところがあったに違いない。米山先生も、改名を考えたことがあると佐々木さんが書いている(「奉仕と創意」P.12)。菊という字は訓がないので、「キクマツ」と読むことは重箱読みになる。「菊松」をそのまま音読みにして通称にしようと、「キクショウ」と読むしかなく、何となく据わりが悪い。しかし、ひっくり返して「松菊」と湯桶読みにすれば、陶淵明の帰去來辞の中の「三徑就荒 松菊猶存」に由来する文学的な雰囲気を持つだけでなく、明治維新の元勲のひとり木戸孝允が号していたことは、夫人の旧称「幾松」との関係からも有名であったから、格好の良い号ないし通称であったと言えるだろう。いずれにしても菊松さんは自ら松菊「ショウキク或はショウギク」と名乗っていたと思われるので、以下「秋邨詩鈔」にかかわるときは、意を戴して松菊さんと記すことにする。

3 「秋邨詩鈔」(以下「詩鈔」という。)中の「展墓」と「高取城」と題する詩。

1) 13丁の表 「高取城有感」と題する詩

「高取城荒餘碧山 亂雲呑吐澗聲間 譙樓無復當年觀 杜宇啼過落照間」



米山先生の漢詩ならば多少は読んだこともあるからと読み出して見たが、全然歯が立たないので、全文をご紹介してみたものの、難しい語が頻出する。例えば第2句の「潤」と記した字の旁は、原文では門構えに月である。漢字源にも見当らない字なのだが、漢字源によると「潤」は谷川の意であるから、「潤聲間」は「谷川の水音を聞く」とでも理解することで納得することにした。といった次第で、私になんとか読めるのは、例えば、「杜宇啼過落照間」を「ほととぎす啼きて過ぐ落照の間」とでも読むのかなといった程度である。救いは、「詩鈔」の序を書いている松菊さんの師匠かと思われる小川伍江や同人と思われる詩人たちの評のようものが欄外に記されていることである。これを読むとなんとか詩意を推測できる。この詩について言えば、角田浩浩という詩人が「高取城君舊藩地、情景共覺淒切。」と記している。「譙樓無復當年觀」という松菊さんの父祖の荒城に対する思いに浩浩が感情移入して、身に染みて悲しさを覚えると評するのが心を打つ。

なお、角田(かくだ)浩浩氏は米山先生の親友で、從吾会のメンバーのひとりだが、大正5年に早逝した。先生は、「哭角田浩浩歌客」と題する「与君生在嶽蓮前 誼似陳雷三十年…」(「藍壺文藻」p.516.)という長大な弔詩を献じ、さらに5年後に「角田浩浩歌客を憶ふ」と題する「春は四たび来にけり 春は君ゆきて寂しき 今日の時しる雨に」(同上p.444.)という破調の和歌を詠んでいる。浩浩歌客に対する友情の深さを知ることができるとともに、松菊さんとの弟兄間の付き合いも深かつたことが思われる。

## 2) 佐々木さん読み下しの「陪母展先考墓光明寺」と題する詩

「寺門松柏鎖蒼煙 萩里歌残誰又憐 不耐如今風樹感 墳塋泣對夕陽前」「陪母」は母に従うという意、「展墓」は墓に詣でるという意として、「母に従って光明寺の父の墓に詣でる」と訳しては見たが、佐々木さんの訳を紹介した後では様にならないので、詩の訳は避ける。「萩里歌」は葬式の時に歌う歌、「墳塋(ふんえい)」は祖先の墓の意か。詩の第

4句「墳塋泣對夕陽前」は上掲の浩浩が、「字字悲愴衷情可知」と評しているとおり、夕日を受けて竹造さんの墓前に涙する母と子の情景が彷彿する…。この詩が稻村氏の云う「展墓」だと思う。

## 4 母うたさんとの関わりを詠んだ詩

「迎母浪越」と題した詩が上掲の2詩の前にある。



「相逢百里柳城天 今日奉歡非偶然 阿母八旬猶健在 關西跋涉幾山川」

「浪越」の意味が分からぬが、松菊さんの母つまり米山先生の母うたさんが、80歳(数え年)にして関西跋渉の旅に同行していることを詩っているのであろうか。うたさんは81歳で亡くなっているので、第3句でいう「八旬」が誇張でないとすると、亡くなる前の年に関西跋渉をしていたことになる。明治40年の東京から高取を含む関西に旅行をするということは大変な難事だったと思う。上記の「陪母展先考墓光明寺」の詩が実感を伴って迫ってくる感がある。浩浩曰く「孝養亦有賴家郷。」……。

18丁表に「戊申八月失母有感」と題した、母うたさんの死を悼む詩がある。

「藥爐烟斷引愁長 風樹宵宵夢不真 一去幽明途已隔 空思白髮倚門人」

伍江曰く「語次眞率、感愴殊深、不堪多讀。」戊申は明治41年。何も言うことができない。伍江の言のとおりだ。

## 5 米山先生との関わりを示すと思われる詩。

17丁表に「和梅馨散吏所寄詩韻」と題する詩がある。

「紅塵脱去便清閒 好住駿南雲石賓 江浦  
灘洄明似鏡 巍然蓮嶽玉孱顏」

米山先生が中学生の頃「梅(ばい)馨(けい)」と号していたことは知られているので、先生が寄せた詩韻に松菊さんが和したと解することができる。「散吏」は文人墨客の雅号に添えて用いる語。この詩だけから梅馨即米山先生と決めるのは早計かという疑問が残る。

24丁表に「過梅馨散史高輪居」と題する詩がある。

「疎雨漸晴秋盡天 紅楓亂點小樓邊 煙波渺  
渺品灣夕 一髮總房來眼前」上の梅馨散吏と同人だろうか。「散史」は散吏に同じ。詩意は秋の梅馨散史の高輪の居宅から千葉方面を望んだ、東京湾の叙景詩だと思う。米山先生が高輪に住んだことがあるのか、そうだとして何時ごろか、いずれも不明。伍江曰く「雨中品海光景寫得如畫。」

37丁裏に「送梅馨散史海外」と題する詩がある。

「朔地如今似比鄰 鐵車千里涉煙津 鴨江  
西去多陳迹 憑弔應吟哈爾賓」「想復君為征外客  
一春離合入詩魂 歐煙米雨三千里 添得  
舊鴻新瓜痕」

この詩は梅馨散史の外遊を送る詩だろうと思うが、詩中に鴨江、哈爾賓、歐煙・米雨等の語が出てくることから、鴨緑江、ハルピン、ヨーロッパそしてアメリカを旅したことが分かる。帰国してから贈った詩か。

「創意と奉仕」は「大正2年3月に、米山さんは英國に出張した。…」と簡略に記しているが、「年表」には第3回外遊と記され、大正2年3月15日に出発しシベリア経由英仏米各国へ旅したとしている。「送梅馨散史海外」の訪問地と完全に一致する。同じ37丁の表に、「詠牛」と題する詩があり「癸丑歲旦試筆」と付されている。癸丑は大正2年であるから、梅馨散史が外遊した年と一致することも間接資料になろう。梅馨という同じ雅号を持った

人が実在して、菊松さんに漢詩を寄せ、大正2年に海外旅行をしたという事実が判明すればともかく、上掲の梅馨は米山先生に違いない。その頃は先生は他の雅号を名乗っていたと思うが、松菊さんにとっては、梅馨散吏はいつまでも中学生梅馨散史であったのだろう。

和田の親子に関わる松菊さんの詩はまだまだあるかもしれないが、漢詩に詳しい方の全詩読み下しを期待してこの辺に止める。

## V 高取藩と和田竹造さんの祖先をめぐって

前編に記したように、高取藩内で和田竹造さんの血脉を辿ることは不可能に近い。そんなことを考えながら、高取町が発行している「高取町史」を捲っていて妙なことを連想するにいたった。

徳川譜代の植村家政が高取城に入部した時から、高取藩の歴史が始まることになるが、「高取町史」によると「本真院殿御分限帳」という高取藩初期の文献に、禄300石を給されている和田嘉右衛門という藩士の名が載っている。同分限帳には、禄高の高い方から1,000石が2名、同350石が1名、同300石が7名とあるから、高位の藩士であったことが分かる。それから下は13石の藩士まで記載がある(p.187-189.)が、和田姓を名乗る家臣は見当たらない。それ以下の下級藩士については「高取町史」に記載がないから、和田姓の藩士が存したには違いないとしても、前編で触れたように市居嘉雄氏は、高取町内の和田姓を名乗る人たちを調査されたが、高取藩と関係のある人はなかったことを記していられる。ということは国許の藩士たちの中にも和田姓を名乗る人が少なかったということを推測させる。植村家政は家臣を引き具して高取に入部したのだから、高取城主として新しい家臣を雇うとなるとその多くは領内、あるいは大和周辺の人材になる可能性が高い。和田家の先祖は家政入部以来の家臣団に属していた可能性は高いのではないかと考えていくと、上記の和田嘉右衛門が引っかかるてくる。

話は無責任に虚構の世界に飛躍する。往年の剣豪作家五味康祐が徳川家光時代の高取藩を舞台にして「上意討ち」という短編を物している。それによると高取藩には、「雲州不伝流『奏者斬り』」を能くし、この技で先をかけられたら刀剣を以てしては防ぐ手はないと柳生宗矩も歎称したほどの使い手」といわれた、和田甚左衛門という400石取りの家臣がいたという設定になっている。和田甚左衛門は有沢勘兵衛という剛直の藩士と肝胆相照らず仲であったが、主命なるが故に已む無く殿中で有沢勘兵衛を上意討ちに果たすことになる。親しい剣の達人同士の虚々実々の心理劇が五味流に書かれている。高取藩は、幕末に天誅組に大砲を打ち込み撃退したという武勇伝で有名である。寛永の頃、剣の達人が実在したとして不思議ではない。五味康祐が和田嘉右衛門をモデルにして小説を書いたということはあり得ることだと思う。しかし、和田嘉右衛門が竹造さんの祖先であったかどうかということになると、藩主植村家の菩提寺宗泉寺の過去帳をはじめ高級藩士の菩提寺を調べるなどの方法はないことはないが、竹造さんが何代かに亘って江戸詰めの藩士で、高取に縁の薄い状況にあったことは間違いないので、和田家の江戸における菩提寺が判明しない限り、はっきりした結論は出せない可能性が高いと言わざるを得ないだろう。和田嘉右衛門先祖説は、あくまで空想の枠の中で膨らませるしかない。こんなことを言いたくなるのも、資料の不足を嘆く思いによるのだろう。

## VI 米山先生の 実父母に対する思い

1 佐々木さんは、「創意と奉仕」の中で、「米山先生は自己を語ることを好まなかった。」(p.133.)と書いている。さらに「ウェスレян大学に入った米山さんはその後ニューヨーク州のシラキュース大学に転じた。どっちに何年いたか、どういう学問をやつたか一切記録がない。ロチェスターでも学んだようだ。(p.35.)」という記述もあるから、かなり徹底していたことは間違いない。それにしても、和田家のこ

と、実父母のことについては、先生滞米中に稻村氏に宛てた手紙の中で「愚父死去致候節は小生幼少にて何の考えも無之…(p.38.)」と書いたことと、その後実母うたさんが明治41年に本郷の栄次郎さんの家で亡くなった時に「臨終まで唯唯感謝の意を繰り返して真に安らかな大往生だったと稻村氏に話した(p.92.)」ことが「創意と奉仕」に記されているだけだ。文筆家、詩人、俳人、歌人であつた先生が実家のことに一文、一句、一首も残さなかつたことには、首をかしげたくなる。

先生は、養父藤三郎さんが亡くなった時には、

門につどふ 村人の言に もれきこゆ  
去りにしわが父の かくれしいさを

という和歌をはじめ5首を、  
養母さくさんが亡くなった時には、

八十年まり 美しきもの 良きものを  
よろこびゆける 善き人なりし  
(藍壺歌稿)

という和歌を、捧げているのである。

この疑問に対する何らかのきっかけを見出せないかという思いから、米山先生が生まれてから明治20年に渡米するまでの間の、実父母と養父母との関わりの流れを追ってみた。

2 年表によると、米山先生が生まれた時うたさんは41歳だった。慶応・明治の頃としては高齢出産といえる。竹造さんが末子梅吉の誕生日も待たずして高取藩士として高取に単身転居した後、うたさんは末っ子を溺愛したのではないだろうか。竹造さんが亡くなった時先生は5歳（満4歳5月）だった。父母と同居の家庭で育っていれば、父親に対する記憶は残るはずだが、上の稻村氏あての手紙で「何の考えも無之」と書いているということは、以来4年近く、同居していなかったことを推測させる。その上、和田系の祖父母が一緒にいたということをほのめかすような記録も全く見当たらないので、全くのお母さん子として育ったのだろう。「年表」は明

治8年映雪舎に入学と推定しているから、これより前に三島に移住し、明治12年に納米里に移ったことになる。すると、三島の母方日比谷家の祖父母との接触は考えられることだが、これも全く記録にあらわれない。密な接触はなかったということであろうか。このような経過を辿ったとすると、明治14年に沼津中学に米山家から通学するようになるまで、つまり生まれてから14年間母の子に対する関係は直接かつ密接な状態が続いたことになるようである。

次に、米山少年は明治16年12月東京に出奔し、明治18年たぶん春頃から明治20年の秋渡米するまでの2年半ほどを、愛宕町でうたさんと一緒に生活した期間がある。そして渡米直前の10月に慌ただしく養子縁組をすませている。

沼津中学に入学した梅吉少年は、長泉の米山家から学校に通った。上記出奔するまでの3年弱である。米山を名乗るようになった梅吉少年は明治28年に帰国するまでの8年間、ポール・ハリスの5年間の愚行と似て非ではあるが、父母祖父母だけではなく近い親族とも全く離れた、孤独な期間を過ごした。

明治29年には著書の出版・結婚・就職と、忙しい人生をスタートさせたが、この年は奇しくもポール・ハリスがシカゴで法律家人生を始めた年であった。

3 人の性格さらには人格といわれるものは、一生を通じて変化することはあっても、大きくは、生まれつき備わっているものと、青年期ごろまでに環境によって形成されるものとからなるといえるだろう。佐々木さんが「創意と奉仕の一生」と評価した米山先生の人格がどのようにして形成されたのか、父母の血統による生得的なものはともかくとして、生まれてからの環境によって変化し形成された性格は、①渡米するまでの母うたさんの教育と、②沼津中学と米山家での数年間の教育と軀そして、③アメリカ滞在中の環境(詳しくは判明し得ないが本多庸一先生の影響が大きいことは無視できないだろう)。ポールは養子の苦労は知らないが、祖父母

の影響で類い希な人格(或いは性格)を作り上げた。米山先生の人格(或いは性格)は、天性の人格に、幼少年期は母うたさんの、中学の三年弱は養父母の、そしてアメリカ留学中8年間は上記本多庸一先生(以外は名前の特定すらできない)の、影響を受けているはずである。どのように養家と実家に対するけじめを身に着けたのだろうか。多感な年代の八年間をアメリカで縁者なしに過ごしながら、アメリカかぶれにならなかつたのは何ゆえか。これらはポール・ハリスの人格あるいは性格形成と比較して論じられて然るべきところである。米山先生についても、その際だった生き様があるだけに、後世は関心を抱かざるを得ないことになるのだろう。

私には、この問題に結論めいたことを論ずる能力に欠ける。先生ご自身が「看雲録」の中で、「人格」と「品格」とを対比して論じていられるので、それを以下に記して終わりたい。「世に人格と云ひ品格と云ふが、人格は天与のもので、稟性であり、而して其の幾分は練磨によりて完成される。人の品格も亦自然に見られるものの如くにして、同じく修養によりて熟達されるものである。此の両者を兼ね備へたものが本多(庸一)先生のやうな人であるが、稀にあって常にはない。人格は暫く特別のものとして、品格は力めて怠らずんば、其の向上完成を期することが出来るのである。」(米山梅吉選集上巻p.317.)

完

完として見たが、未だに納得できない。



養父母金婚の祝い(米山梅吉45歳)

大正2年、第3回外遊(シベリア経由英仏米各国への旅)を終えた頃。養父母の金婚式はこの年の10月である。



私は、昭和42年(1967)5月2日に沼津北ロータリークラブに入会させていただきました。沼津北RCが創立7年目になるのですが、活発に素晴らしい色々な活動が行なわれ、エネルギーがあふれています。沼津北RCにとって飛躍の年だったと思います。6月には御殿場RCが沼津北RCの初めての子クラブとして誕生しました。御殿場RCは6月1日に創立総会を開き、6月23日にRIに加盟承認されました。そんな大事な記念すべき時期に、私は入会することができました。

最初はクラブに溶け込むよう親睦委員となりました。その翌週、先輩の野田さんが「今月23日、米山桂三先生が来ますから、親睦委員は遗漏なきよう務めもらいたい」と話をされました。私は、米山桂三先生というのがよくわかりませんでした。当時、私自身米山梅吉さんも知らず、なんでみんながこんなにピリピリするのか。でも例会を重ねるごとに、先輩たちが普段と違うことに気がついたのです。

梅吉翁の長男、次男の方は早世されています。桂三先生は梅吉翁の三男です。私は入会して4回目の例会で圭三先生の卓話を拝聴する機会を得ました。その例会にお出でになるゲストも、静岡のパストガバナー鱸正太郎先生をはじめ錚々たる人たち。私が入ったころは、ガバナーといえば、もう皆さんが怖がるほどの存在でした。名前を聴いただけでも震えがくる、会うだけでも身震いするくらい尊敬する方々と教えられてきました。当日は、近隣のロータリーの名だたる方もお出でいただいています。当時の会報には、その名簿と卓話の内容も載っています。

米山桂三先生は大変体格のいい堂々たる方でした。当慶應大学の法学部長というお立場でご多忙の中、桂三先生がお出でになった理由は、梅吉翁を顕彰しようというこの地区の有志の方々の思いが情熱と化して、何とかいろいろな蔵書を保管しながら、ロータリアンに後々見てもらう記念館を作りたい。そういう思いを米山先生にぶつけることでした。私は当時、桂三先生は卓話が終わってすぐお帰りになつたと思っていたのですが、それどころではない。有志の方々が夜遅くまで話し合い、熱意をこめて説得というよりもお願いするという、非常に難しいお役を務められたことでした。

米山記念館については、下土狩駅前の米山家の別邸の土地3000坪の一部を、皆で話をして米山翁の精神を永く保存する記念館にしたい、と寄附を集めましたが、土地を買うだけの資金が集まらなくて取りやめになった。それでも実家の方を少しでもお借りしてここに建てたい。そういうお願いをしました。しかし、桂三先生は「父はそういう意思でやっていない。ロータリーはみなさんがつくってくれたのだから」ということで断られてしまいました。それでも皆さんからお預かりしたお金もあるので、何とか継続して米山梅吉記念館の土地を求めて小さなものでもいいから作りたい。そんな皆さんのお意気込みが、桂三先生の心を動かしました。そして二年後、桂三先生が三島RCにお越しになり、卓話の後の会合で150坪の土地、実家の長屋門も付けてお借りすることができるということになりました。その後、この土地はご寄贈いただきました。それから、皆さんのが魚が水を得たような勢いで財団法人米山梅吉記念館をつくり、松井謙一さん(沼津北RC会員)が初代の理事長になりました。

私が米山梅吉記念館に自分なりに思い入れがあるのは、昭和59年に、地区から米山記念館小委員会が立ち上がり、委員に私が指名されたことからです。その時の委員長が、沼津北RCの土屋忠男さん、三島西RCの小野金彌さんが副委員長でした。土屋さんが二、三年やって小

私が委員長になるという流れで、私が一番長い年数を役員を務め、記念館新館ができるまで務めました。

私が委員長の時には、記念館の看板が古くなり、塗り替えをしました。それから三つある梅吉翁の俳句の碑のうち、二つの碑石の説明看板を新規に作りました。「三つ全部作りたい」と計画書を提出したら、「予算がないから駄目だ」と言われました。米山梅吉記念館は全部の運営が寄附しかない。寄附以上のこととはできない。そういう思いを自分は味わいました。

平成5年、長泉の教育長を務めた吉川邦夫氏、長泉の歴史郷土研究家の柏木勲氏、お二人が米山記念館の管理に入ってくださいました。お二人は先ず、長屋門に保管されていた米山さんの古い本の整理をしてくださいました。梅吉翁は昭和21年にお亡くなりになっていますから、30年以上経って埃がたまっている。その埃を全部掃除し、折れているものは霧を吹いてアイロンで伸ばして、皆さんを見やすいようにしてくれる。信頼できる方々でした。そのお二人から「この建物は、夏は暑いし冬は寒い。冷暖房をいれてほしい」と依頼され坂本理事長にお願いしましたら、これも「予算がないからすぐにはつけられない」と言われました。「でも、あの方々は一生懸命やってくれている、何とかできないか。」そこで、坂本理事長は、地区の了解を得て、地区からの1000円の補助金に100円上乗せしてもらうことで冷暖房を設置することができました。お二人は大変喜んでくれました。それまでは、見学者があれば我々が行って鍵を開けていたのですが、このお二方が管理者に入ってくれたお陰で、行かなくてもよくなつた。蔵書の整理もついた。そういうことを知っている人は、今ではあまりいないのではないかと思っております。

もう一つ、我々がやったのが米山梅吉児童公園の整備。滑り台が朽ちて欠けていた。普通の大工さんではできない、ということで長泉町の教育委員会に頼んで、専門の業者さんに治していただいた。また、地球儀のような遊具も壊れかけていた。私は理事長に「壊れてから治すのではいけない。近所の子どもたちが怪我をしたら間に合わない。米山梅吉さんの顔に泥を塗るわけにはいかないから」と予算が厳しい中、年間5万円の予算をとつていただき、専門の業者さんに点検修理してもらいました。それが子供好きだった梅吉翁の意思ではないかと。そのように安心・安全に配慮したおかげで、子供達に事故なく利用され、新館ができる時に児童公園はその使命を果たしてなくなりました。予算の厳しい中でしたが、このようなことをやってきました。

そんなご縁で、私もロータリー生活50年を迎え、米山梅吉記念館にスマイルを差し上げたいと思っていました。50年の卓話ではぜひ記念館の話がしたかった。50年の歩みを振り返ると、いろいろな思い出があります。そして、立派な先輩たちに恵まれてきたことだけは間違いないことです。

これから50年を考えると長い。でも過ぎ去ってみれば50年は一瞬です。これから50年に向って、今までの伝統を受け継ぎ、沼津北RCが歩んでくれればありがたいと思います。私も一年一年を大事にしながら、50年の上積みをしていきたい。好意と友情に満ち溢れたロータリーを人生の心の指針にして、4つのテストを守りながらこの先を歩んでいきたいと思います。



昭和56年時の記念館



旧館



児童公園

# 梅吉翁ゆかりの品

このたび、東京在住の伊臣ゆり子様から3点の資料が寄贈されました。伊臣様は、梅吉の長女高木愛子さんのお孫さんにあたります。

梅吉の二人の娘高木愛子さんと荒川澄子さんは、結婚後も東京青山の隣同士に住まい、よく行き来して、従妹たちも兄弟のように仲良くされていました。「これも梅吉さんのお陰かしらね」とゆり子さんは懐かしそうに語られました。愛子さんは、米山家にいる時は朝食時にはナイフとフォークで頂いていたので、結婚後高木家の朝食もナイフを使うように変えてしまったそうです。クリスマスには、青山学院の聖歌隊がやって来て、家の外で賛美歌を歌ってくれたそうです。愛子さんは、90歳を過ぎてもソロバンをはじいて確定申告もご自身でやっていらっしゃいました。

梅吉夫人 はるさんは、三味線を嗜んだり、点字の勉強をしたり、和歌も作ったりと文化的な活動を幅広くやっていたそうです。ひ孫達とお茶のお稽古もしたそうです。子ども達は、お菓子を楽しみに正座を我慢していました。ある時、澄子さんのお孫さん るみ子さんが待ちきれずに先にお菓子を食べてしまい、はるさんに怒られました。はるさんは、優しいけれど厳しい面ももった人でした。はるさんは、青山学院初等部の運動会に招待されていました。来賓席で、梅吉と共に初等部の子供達の成長を見守っていたころを思い出していたのかもしれません。

昭和25年、高木家ではそれまで桂三氏と一緒に住んでいたはるさんを迎える為に建て増しをして、晩年のはるさんと共に生活をしました。愛子さんはかいがいしくはるさんの世話をしました。はるさんが亡くなったとき、ゆり子さんとまき子さんは末期の水をとるようにいわれました。二人は、はるさんの口元を湿らせた時、その水がひとすじ、はるさんの頬を伝っていったことを子ども心中に覚えていました。

寄贈された資料は、米山家の家紋が染め抜かれた風呂敷、ロータリーマークが記された小物入れ、柱時計の3点です。柱時計の裏側には、「下土狩 米山別荘」と張り紙がされていました。梅吉の晩年、共に時を刻んだ時計でしょうか。米山家の歴史を見守り続けた貴重な資料は、記念館の新たなお宝となりました。



掛け時計



掛け時計の背面



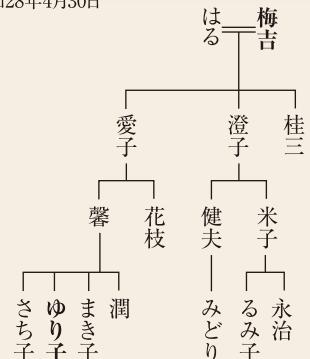
内面に  
ロータリーマーク



大形の名入りふろしき



昭和28年4月30日



# 米山梅吉記念館 秋季例祭

お知らせ

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

[日時] 平成29年9月16日(土)午後2時～ ●開会前墓参

[場所] 米山梅吉記念館ホール

●講演(14:30～)

[講師] 動物先端医療センター・AdAM  
院長

伊藤 博氏  
(東京農工大学名誉教授)



■プロフィール

1951年山形県で生まれ66歳  
1973年北里大学畜産学部獣医学科を卒業後、獣医学博士を取得  
1995～2005年北里大学畜産学部外科学教室 助教授  
2006年東京農工大学付属動物医療センター専任教授  
2016年東京農工大学付属動物医療センター長  
2017年東京農工大学名誉教授  
2017年動物先端医療センター・AdAM 院長

[演題] ヒトと動物の絆

～動物との共生により優しい心を育みましょう～

●懇親会(16:20～) **登録料無料**

ロビーにて講師を開んでの懇親会  
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

## 米山梅吉研究に欠かせない一冊!

ロータリアンとして、教育者として、  
社会奉仕者としての米山梅吉研究の集大成

超我の人 米山梅吉の聲音  
あし おと

米山梅吉記念館の創立35周年を記念して編集された本書は、米山梅吉の生涯や業績、記念館建設の経緯などを知る上での格好の一冊で、「生き立ちと人となり」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」などの章には、多くの資料と共に詳細な解説がなされています。資料編として、米山梅吉が会議や大会で行った挨拶や講演、ロータリー月報やラジオ放送の内容なども掲載。記念館所蔵の図書目録、年表など網羅されています。



(財)米山梅吉記念館刊

B5判／上製本  
本文268ページ／2,500円  
記念館刊

日本のロータリークラブと  
信託業の創始者

点描 米山梅吉

三井信託副社長を務めた著者が、佐々木邦氏の『米山梅吉伝』をふまえ、さらに新しい視点から米山の人物像に迫った1冊。特に、金融界での活躍や、「米山梅吉伝」ではあまり多く語られなかつた三井報恩会の事業について掘り下げ、奉仕の人米山梅吉に迫る1冊です。現在、一般書店では手に入らず、米山記念館のみで取り扱い中。



谷内宏文著 新風舎刊

文庫判  
本文369ページ／890円

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。  
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。  
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館  
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

館報29号10ページ、千玄室様のお名前に誤りがございました。訂正してお詫び申し上げます。

### 米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分  
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

### 米山梅吉記念館 館報

Vol.30 秋号

発行日／平成29年8月19日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助

〒411-0941静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL(055)986-2946 FAX(055)989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail [yumh@ai.tnc.ne.jp](mailto:yumh@ai.tnc.ne.jp)